

教育的価値	具 体 の 項 目	教育課程
2【かかわる】	⑨【地域の人々とのつながり】 被災者や高齢者が一緒に生活している地域社会において、互いに支え合うことの大切さを実感する。 ⑩【ボランティア】 被災者や地域社会に役立つことを自分から進んで実践し、他人の喜びを自分の喜びとして共感する。	特別活動 総合的な学習の時間 道徳の時間

【題材】

【対象】

「あたたかい心の輪を広げよう」

住田町立有住小学校 全校児童 87名

【実践の概要】

本題材の実践では、上記「具体の項目」をねらいとし、本校の重点研究としている道徳教育と、特別活動・総合的な学習の時間に位置付け、相互に関連を図りながら学習活動を展開した。実際の指導を進めるにあたり、

- 1 特別活動や総合的な学習の時間に実施してきた地域に関連する体験活動の充実を図る。
- 2 体験活動を通して得た思いや気付きを、道徳の時間と関連させながら補充、深化、統合を図る。

以上の2点を指導の柱とし、相乗効果をもって児童の内面に根ざした心や態度の育成を図れるよう取り組んだ。

【実践の実際】

1 地域とかかわり、あたたかい心をはぐくむ体験活動

実践① 「有住の仮設住宅で暮らす人たちと交流しよう」

〈 運動会、学習発表会に招待しよう 〉

地域の仮設住宅の人たちを運動会や学習発表会に招待し、少しでも元気になってもらおうと活動に取り組んだ。全校で招待状を書き、児童会執行部が仮設住宅一軒一軒を訪問し、一人一人に自分たちの思いを伝えながら招待状を配付して歩いた。



児童会活動

〈 自分たちで育てた花を贈ろう 〉

運動会に招待したことをきっかけに、本校で毎年行っている学校花壇づくりの活動を生かし、自分たちが心を込めて育てた花を地域の仮設住宅の人たちへ贈ることにした。児童は少しでも喜んでもらおうと、花植えや水やり、草取りなどのお世話を毎日熱心に取り組んだ。全校で育てた花は全戸に4・5・6年の児童代表が届けてまわった。



実践② 「震災津波被災地の今の様子を自分の目で確かめよう」

震災津波被災地の今に触れるため大船渡市と陸前高田市を訪れた。大船渡市では、三陸鉄道震災学習列車を利用し、新たに開通した釜石駅を始発駅に終点盛駅まで車窓からの景色を眺めたり、ガイドからの被害状況を聞いたりした。陸前高田市では地元ガイドの案内を受けながら奇跡の一本松や旧市街地のかさ上げ状況を見学しながら巡った。児童はメモを取るなどしながら熱心に被災状況や現在の状況を確認していた。

見学後、「被災地の今」を家庭や地域に伝えるため、ノートにまとめる形で見たり聞いたりしたことや、気付き、思いをまとめる学習に取り組んだ。



総合的な学習の時間

児童の感想から

- 昨年より建物が多く建っていたり、がれきが少なくなっていたりして、少しずつ復興が進んでいるけれど、まだ遅れていると思いました。
- ガイドさんの話から、自分の命は自分で守ろうと強く思いました。
- 復旧が遅れており、他県からも応援をもらっていることを初めて知った。
- オリンピックの影響で復興が遅れなければいいなと感じました。
- 小さな事でもできることがあったらしたいと感じました。

**実践③ 「震災時に住田町が行った行動を知り、自分たちにできることを考えよう」**

総合的な学習の時間

震災時、被災地に対していち早く後方支援を行った町の行動を町長に話してもらい、郷土に誇りを感じると共に、今後の自分のあり方について考える機会を持つ。（3学期実施予定）



【町独自で立てた仮設住宅】

2 体験活動で得た気付きや思いを深める道徳の時間（6年生の例）

主題名 「続けること」

資料名 「わたしたちの小さな駅」（ぶんけい） 内容項目 4－（4）勤労、社会奉仕、公共心（ねらい）

地域活動やボランティアなどの奉仕活動の意義を理解し、人や社会のために働く喜びを知り、公共のために積極的に役立とうとする意欲や態度を育てる。

〈展開の概要〉

導入：学校や地域社会で行われている奉仕活動について知っていることを発表する。

展開：前段では、無人駅の清掃を引き継ぎ、続けている兄妹の話をもとに、主人公の思いについて話し合いを行った。その中で、働くことの意義と社会のために役立つことの大切さに気付かせるようにした。後段では、自分たちの生活をふり返り、これまで行ってきた勤労や奉仕の体験を想起させることで価値の意味づけを行った。

終末：自分にできるボランティア活動は何かを考えさせることで、今後の意欲を高めるようにした。

〈体験活動との主な関連付け〉

導入で、仮設住宅への運動会の招待状や花を届けたことを想起させ、価値への方向付けを図った。また、展開後段では、自分たちが行ってきた活動を資料と照らし合わせながら、自分たちの思いとその社会的な価値について話し合い、意味づけを行った。終末では、自分たちにできる活動を考えさせることで、今後も仮設住宅の皆さんへ継続的に支援していく意欲を高めた。

**3 まとめ**

目的意識を明確にし地域とかかわる体験活動に臨ませたことで、児童は意欲的に活動に取り組んでいた。人ととかかわり合う中で、そのよさや人の役に立つことの喜びを感じることもできたようである。また、震災津波被災地見学を組み込むことにより、今の被災地の状況を感じ取り、これからの自分のあり方を考えるよい機会となった。そして、これら一連の体験学習の価値化を図るため道徳の時間の学習と関連付けて指導を行ったが、体験したことが生かされ、ねらいとする価値への思いを一層深めることにつながった。

このように体験活動と道徳教育を相互に関連付けながら本題材を進めたことにより、児童は地域にかかわることのよさや、地域や被災地に思いを寄せて自分ができることを考える大切さについて実感をもって学ぶことができた。